

教員養成における筆順指導 —「潟」の筆順を起点として—

清水 文博・角田 勝久

はじめに

筆順指導は文字を書く過程の学びの中核を担っている。周知のように筆順指導は、漢字の書き取りの指導等文字を手書きすることに関わるさまざまな学びの場面に必要である。特に教師が板書をする際の筆順が学習者に見られるものであることから、望ましい筆順を習得し、板書できることが教師の資質の一つであるともいわれる。このいわゆる正しい筆順の源としては、今から50年以上前に文部省から出版された『筆順指導の手びき』¹⁾があり、教科書や字書作成の際の参考にされている。

次期小学校学習指導要領で取り扱われる「潟」は、筆順指導で意見が分かれる文字である。この筆順に着目することが、小中学校国語科、さらに高等学校芸術科書道の教員養成で『筆順指導の手びき』を取り扱うにあたって、学生の興味関心を引くのではないかと考えた。本稿は、新潟で学ぶ大学生が「潟」の筆順を起点として筆順指導について学習する際の授業構想を探ろうとするものである。

1 「潟」を起点とした学びの構想

(1) 「潟」の筆順エッセイ

次のページに掲載した筆者のエッセイは、大学生が「潟」の筆順指導について考えるために作成したものである。「潟」の「臼」の部分の筆順に二系統あり、普段どのように書いているか考えることは、日々「潟」を書いている新潟県民にとって興味を引く話題になるだろう。また、「潟」を日常的に書いているのは、新潟県民だけではないことにも目を向けなければならないだろう。秋田県には八郎潟や象潟、千葉県には干潟という地名があるように、全国には「潟」を含む地名は多数存在する。また「臼」を含む漢字の地名に住む方はもちろんのこと「臼」が姓名に入っている方などは頻繁に「臼」を手書きしていることになる。

筆順について考える際は、字体と字形の問題に触れないわけにはいかない。一般社会で使用する字体と字形については、先般文化庁が「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」²⁾を示している。筆順について授業で取り扱うにあたっては、この報告を学生にも紹介したい。この報告が新聞等で大きく取り上げられたことによって、手書き文字の字形の書き方の幅の広さが知られることとなった。これは従来の考え方の上にたった事例集であり、いわゆる漢字の手書きの許容の考え方が従来から転換したというような見方をすべきものではないだろう。

エッセイにあるように、「潟」が次期学習指導要領から小学校の学習漢字に入るわけであるが、これは2010(平成22)年、常用漢字表³⁾に追加された漢字ではなく、1981(昭和56)年の常用漢字表の制定当初に当用漢字になかった漢字として取り入れられたものである。県内に設置されている看板などでは、「潟」の「臼」の部分が「旧」になっているものを時折見ることがあり、使われていないというわけではないのだが、常用漢字表では「潟」に「旧」を採用していない。おそらく地名の文字を略字には変更するべきではないという考え方よったものであろう。

小学校学習指導要領には「漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とする⁴⁾

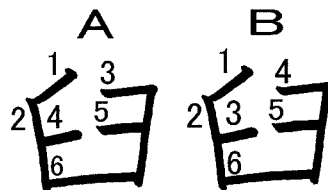
とある。これと関連して学習指導要領に示された教科書体活字の字形の要素は、漢字指導の参考にされている⁵。「渴」の漢字指導について考えるにあたって、これから示されるであろう教科書体活字が一つの基準になってくることを補足しておく。

「渴」の筆順指導

新潟大学 清水 文博

「渴」は手書きで書くのが難しい。新潟県外の方から手紙をいただくときに「白」が「𠂇」になっていることや下の部分が「勿」になっていることは、よくあることである。本年5月17日、中央教育審議会は、次期学習指導要領で、都道府県名に使用されている漢字を小学校国語科で全て学習する案を示した。今まで小学校で学習されていなかった都道府県名に使用されている漢字とは先般改定常用漢字として追加された「茨、媛、岡、熊、埼、鹿、栃、奈、梨、阪、阜」と、常用漢字にもともと入っていた「渴、岐、香、佐、崎、滋、縄、井、沖」の計20文字である。ここには新潟の「渴」が入っている。小学校で「渴」を教えることにより「渴」の誤字問題は徐々に減少していくと思われる。これは新潟県民として歓迎すべきことだろう。手書きと活字の字体の違いの問題は、本稿と密接に関わることであるが、煩雑になるのでここでは詳しく取り上げない。ただ新潟県では伝統的に「渴」を「𠂇」などを書く歴史があり、現在も昭和56年の常用漢字制定以前に文字を学習した世代を中心に使用されていることを付記しておこう。

さて、本稿で取り上げようとするのは、この「渴」の筆順についてである。新潟に住んでいる以上、「渴」の文字を手書きする機会が多い。この筆順に二つの系統があるのはご存じだろうか。二つの系統とは「渴」の「𠂇」の部分についてである。「𠂇」の1画目は左払い（左に払う点と言ってもよい）、2画目は縦画、ここまではどちらも同じ。ひとつの方法は3画目で折れを書いてから2画目に接する横画を書き、その右横の横画を書く。もうひとつの方法は、3画目は2画目に接する横画を書き、その後右上の折れを書き、その折れに接する横画を書く。言葉での説明よりも【図1】を見ていただくと分かりやすいだろう。ここで前者をAパターン、後者をBパターンとしよう。



【図1】

前者をAパターン、後者をBパターンとしよう。

現在学校では、漢字を混乱なく教える必要性などから、1つの文字に複数の筆順があることを認めながらも、一字一則主義（文部省『筆順指導の手びき』1958）をとっている。ただし、これはあくまで学校で混乱を来さないように教えることを重視して定めたものであり、ひとつのみの筆順以外を「誤りとするものでもなく、また否定しようとするものでもない」ものなのである。この『筆順指導の手びき』は、これまで国が発表した唯一の筆順の基準を示した手びきである。筆順はどちらかという教える側の論理により便宜的に一字一則を定めたものであり、この手びきの理念からすれば文字を習得した後に学校教育で筆順をテストし、それに正誤をつけるというような取り扱いをするべきものではない。とはいえ学校制度のなかで、「一斉学習」として文字を学ぶときには、一字に一つの筆順が決められていたほうが学習はしやすいし、効率的でもある。また、『筆順指導の手びき』の筆順は、「右」と「左」の筆順を変えるなど、わりと東アジアの漢字文化の伝統を重視して定められており、筆順によって形成される伝統的な漢字の字形を習得することがめざされているとよいのである。

さて、次期小学校学習指導要領で「渴」の文字は、どちらの筆順で教えたらいだろうか。「渴」はこれまで小学校の学習漢字でなかったため『筆順指導の手びき』に筆順が掲載されていない。私は新たに加わる20文字のうち、筆順指導については「渴」が最も意見が分かれる文字であるとみている。さて、Aパターンで教えるのが良いか、Bパターンが良いか。再度、『筆順指導の手びき』の理念を繰り返すが、文字文化としてはAでもBでも構わない。小学校で漢字を一字一則で教えるのであればどちらをとるかである。

まず私は、現在出版されている大手老舗出版社の漢字辞典で「渴」、さらに「𠂇」の筆順としてどちらを掲載しているかを調べてみた。筆順を掲載していた3社の漢字辞典は全てBパターンであった。次に、筆順

についての多くの著書を出版された江守賢治氏の筆順字典をみても「渴」も「白」もAパターンであった。さらに、現在出版されている小中学生の学習用に出版されている漢字辞典をみても。現在の小学校の学習漢字以外は筆順を掲載していないものが多かったが、常用漢字の筆順を掲載していた2社のうち1社は、「渴」をAパターン、「白」をBパターンにし、もう1社は「渴」をBパターン、「白」をAパターンとしていた。さらに、国語科書写で参照されと思われる大手書道出版社が出版した字書を調べてみると、「渴」も「白」もBパターンであった。つまり現在、「渴」の筆順の統一見解はないといってよいのである。社会の影響力ということから大手老舗出版社の漢字辞典の掲載例を重視するとBのほうが少し優勢といえるだろうか。

この二系統の筆順のどちらを採用しているか大学生に聞くと、Aで書いている学生が多いようである。ただし、Bパターンで書いている学生も一定数いる。小さい頃Bパターンで習った記憶があるという者もいた。Bパターンは、「渴」の内側の空けるところ（Aパターンでいうところの4、5画目）が、連続した画にならないことで空けやすくなるのかもしれない。

どちらの筆順を採用するかを考えるにあたり、上で行った現在の漢字辞典調査のほか、歴史的に「渴」がどちらの筆順で書かれていたのかを調べてみるのは一つの方法である。過去の毛筆文字を収録した書道字典で日本や中国等で書かれた「渴」の行書体を引き、その筆脈（点画のつながり）から書いた筆順を判別するのである。私がみたかぎり、書道字典には「渴」の文字サンプルが少ないため「渴」があまり掲載されていないようである。それでは単体文字の「白」はどうだろう。「白」の文字サンプルは多いのだが、古来「白」と書くことがあり、日本の古名蹟で【図2】のように書く例がある。この伝統を取り入れるとすればBパターンが優勢なのかもしれないが、これと「白」さらには「渴」を同一視してよいものか。



【図2】

このような書道字典の調査のほか、新潟で過去に書かれた「渴」の字形の調査や、『筆順指導の手びき』以前に出版された筆順を示した字典や学習指導書のようなものを調べてみるのも検討できるかもしれないが、上に述べたように「渴」が「泻」などと書かれたことや、「白」の書き方が様々であったことを考えると、過去の字形の調査から、「渴」の筆順の指針になるようなまとまったデータが収集されることや、現代の「渴」の筆順決定の決め手となるような筆順の記述を発掘するには困難が予想される。

次期学習指導要領で「渴」は文字の複雑さや社会科の都道府県名の学習を考慮すると、中学年以降で学ばれる文字であると考えられる。低学年とは違い、中学年の指導では筆順の多様性を認識させるため、どちらでもいいという考え方もなくはないのかもしれないが、「渴」のみ一字一則が定められていないということになると、教育現場が混乱するという意見もあるだろう。A Bどちらを採用するかについて考えるにあたっては、歴史的な慣習を調査することも大切であるし、運動工学などの見地から筆順の原則をふまえつつ、速く楽に字形を整えて書ける筆順を採用してみるという考え方もあるのかもしれない。さまざまな考え方を参考にしながら、やはり現代に生きる私たちが今書きやすいと思う筆順パターン、つまり新潟に住む私たちが書いている筆順の多数派を主流として小学校で採用するという方針をとるのは一つの方法といえないだろうか。

ここに述べたように、これから小学校で「渴」の筆順をどのように指導するかは、簡単なようで結構難しい問題である。新潟に住むものとしては、日常的に書いている「渴」の筆順について、次期指導要領とそれを反映させた小学校国語教科書と小学校国語科書写教科書でどう取り扱うべきかについて話題にしてみるのはいかがであろうか。

(2) 3つの視点

上のエッセイでは、一字一則を定めるとすれば、どの筆順を取り入れるかを考えるにあたり①伝統②筆順の機能③現在の多数派の3つを示した。

まず①にあげた伝統については、「白」の書き方の伝統をそのまま渴に転用できるかは意見が分かれるところであろうが、行書体で先に左側を書いてから右側を書くことは重視されてきたようであることは確かである。ただしこれは【図2】のように下が空いている字形で書かれたものがあり、現在の「白」と字形が異

なっているのである。【図2】は日本の古筆で書かれた行書字形の一例である。このような伝統を重視する意見と関連し、久米は「渴」の筆順について次のように記している。

「白」の形をもつ文字は、旧字体時代にはかなりあったが、戦後の字体整理で姿を消した。新漢字表の中から同類を探すとしたら、「興」ぐらいであろう。

aは、その「興」と同系の筆順である。古来、このaの筆順が普通に行われてきた。

一方、bの筆順も行書の一部で行われていた。「日」につながる筆順である。しかし、楷書で書く場合、中央部の短い横画を、点線を書くようにして左から右へと書くのはどうだろうか。やはり、「興」のように、右部は右部としてまとめてから左側に移り、最後に共通の底となる画を書く筆順、つまり、伝統的なaの筆順を基準とするのがよい⁶。

(筆者注、aはエッセイのBの筆順を「渴」で示したもので、bはエッセイのAの筆順を同じく「渴」で示したものの。)

つまり、久米は行書の伝統ということだけではなく、漢字の分類にも着目しているのである。たしかに、「興」は漢字字典で「白」に分類されるのが一般的であり、当用漢字表にも「白部」に掲載されているが、中国最古の漢字字典で漢の許慎が著した『説文解字』は「興」を「昇」部に掲載している⁷。「昇」は「白」の系統であり、「白」(うすのかたち)と「白」(両手のかたち)とは成り立ちが異なっている。エッセイに書いたように「白」と「白」は同じように手書きされてきたことは確かだが、筆順を考えるとときに「白」と「興」を同一視してよいのかと考えることもできよう。

②の筆順の機能については、学生が筆順について議論する際の話題として最も適していると思われるため、次章の実践で詳しく触れることとする。

③は、現代の多数派を採用するという意見であるが、これはアンケート調査をすることによってすぐに結果が分かることである。「書写」を受講する大学生58名(新潟県出身者35名、他県出身者23名)にABどちらの筆順を採用しているか調査したところ、全体ではAパターンが57%、Bパターンが41%、ABにあてはまらない、Cパターンというべきもの(Bと同じく短い横画を書いて、4画目に下の一番長い横画を書いて、5画目に折れを書く。)が2%であった。新潟県出身者のみではAが57%、Bが39%、Cが4%であった。このデータからは、新潟県出身者であれ、他県出身者であれ、おおよそA:Bは3:2になるということがわかる。ちなみに、「書写」受講者には書道の専門教育を行う課程の学生は含まれていない。この割合は、年代によって異なってくるのかもしれないが、大学生の場合、出身県にかかわらずAのほうが優勢であることがわかる。

2 「渴」を起点とした教員養成学部学生の学びの実際

(1) 『筆順指導の手びき』を読む

1958(昭和33)年に文部省が『筆順指導の手びき』を出版した当時のいわゆる教育漢字は881字であった。この漢字の筆順から類推されて、現在は1006字の筆順が小学校国語科教科書に一字一則で示されている。次期学習指導要領からはこれが1026字になる。これまで書いてきたとおり、文部省『筆順指導の手びき』は「手びき」であるが、現在も学校の筆順指導の実質的基準となっている。教員養成ではこの「手びき」を読み、理念等を知る必要があるであろう。この理念を理解させずに一字一則の筆順を学生に機械的に暗記させるのは望ましい指導ではない。

実践は、書表現コースの2年生16名が受講する「書道科教育法Ⅱ」でおこなった。書表現コースでは、ほぼ全員が高等学校芸術科書道と中学校高等学校の国語科の一種教員免許状を取得予定である。まず国語科書写の教員養成テキスト⁸に掲載されている『筆順指導の手びき』の「1. 本書のねらい」と「2. 筆順指導の心がまえ」を読むこととした。「ねらい」では特に以下の引用部分を強調した。

このような現状から見て、学校教育における漢字指導の能率を高め、児童生徒が混乱なく漢字を習得するのに便ならしめるために、教育漢字についての筆順を、できるだけ統一する目的を以て本書を作成した。(中略) もちろん、本書に示される筆順は、学習指導上に混乱を来たさないようにとの配慮から

定められたものであって、そのことは、ここに取りあげなかった筆順についても、これを誤りとするものでもなく、また、否定しようとするものでもない。 (傍線筆者)

つぎに、「2. 筆順指導の心がまえ」を読み、特に上から下へ、左から右へという大原則をふまえて系統的に筆順が定められていることに気づくようにした。また最後の一文に、「教師の板書は、つねに定められた筆順によって書くようにしたい」とあることにも着目させ、教師の知識・技能としての望ましい筆順の習得の必要性についても理解できるようにした。

(2) エッセイを読み、議論する

手びきの「ねらい」と「心がまえ」を読み、筆順指導の考え方について知った後、エッセイを配布し読むこととした。前述の①伝統②筆順の機能③現在の多数派のうち①は字書や指導書など手に入りにくい資料にあたらなければならない。③の多数派の調査は教室内で即座には行いにくい。②の筆順の機能は、教室内で議論するのに最も適しているだろう。②を議論するにあたっては、松本が筆順の機能性を書きやすさ、覚えやすさ、読みやすさ、整えやすさの4つに分類している考え方を取り入れたい⁹。覚えやすさを取り入れているのには、押木の筆順研究の概念¹⁰が参考にされている¹¹。実践では、ABどちらを取り入れるべきか、この4つを紹介してから機能面を中心に議論することとした。その後、AB双方の意見について一人ずつ紹介することとした。それぞれの意見は次の通り。

私はAパターンが良いと考える。なぜなら、白に似ている字として「白」がある。白は小学校1年生で覚える漢字であり、なじみ深いものだ。その「白」とほぼおなじ筆順にすることで我々は混乱することなく筆順を覚えることができる。この考えの裏づけとして「上」や「占」など形が似ているものはだいたい同じ筆順で書くという系統性があることが挙げられる。

私は個人的に白を空ける必然性を考えるとBの方がいいのではないかと思う。しかし、私は日常のなかでAで書いている。これは機能性の書きやすさ、覚えやすさという面で「白」と似ていることからAで書くのだと思う。「白」と似ていることから中の横画がつながってしまいそうになり誤字っぽくなる人がいるとも思う。そこから読みやすさを考えるとAだと誤字っぽくなる可能性がBより高いのではないかと思う。整えやすさを考えると最初で述べたように必然性を考えるとBが良いと思う。

(傍線筆者)

どちらの学生も新潟出身で、日常的にはAで書いているという。Aを支持するものは、覚えやすさ、Bを支持するものは、読みやすさ、整えやすさというところに着目するのは予想されたとおりである。再度の議論のあと、学生が最終的に提出した意見には次のようなものがあつた。

○Aを支持

・私はAを推薦します。昔から書きなれているが、BよりAのほうがバランスがとりやすいと思う。Aではこの部分(筆者注Aパターンの3,4画目)を連続して書くため、より一直線上に平行に書ける。対してBでは一テンポはさむので、バランスがとりづらくなると思う。

・私の筆順はAパターンです。今までBパターンを考えたことがあるけど、動きが面倒なのでやめました。

・私は、Aの筆順のほうが良いと思う。(中略)私もAの筆順であるし、地方出身である私の周りの人はほぼAの筆順であった。この資料を読んで初めてBの筆順があることを知ったぐらいである。

・私は機能性を重視するならば、Aパターンを採用するべきであると思う。なぜなら、まず字の骨格となる外側の部分(筆者注Aパターンの1~3画目)を書くことにより均整がとりやすく、また美しく見えると感じるからだ。

○Bを支持

・私はBの書き順の方が良いと思いました。普段Aの書き順で書いていますが、4画目と5画目がいつもつながってしまうので、Bの方が確実に間をあけることができ書きやすいと思います。Aの書き順とBの書き順両方で書いてみましたが、Aは4、5画目がつながってしまい、Bは「白」が横に広がってしまい全体として不恰好な字になってしまいました。しかし、漢字として正しく書けているのはBの方なので、整えやすさには欠けるかもしれませんが、Bのほうが正しく書きやすいと思います。

・Aパターンは四画目、五画目を続けて書くことから、つながってしまうことがおきる可能性がある。それでは本来の「濁」の文字を覚える目的から外れるだろう。

・無理に統一せず、使いやすい方を使うべきであると考えます。しかし決めなければならないというのであれば字形が整いやすそうなBパターンを使うのが良いと思います。

・字の汚いと言われる人の場合、誤字と認識されてしまうだろうから、真ん中の空間をしっかりと表すにはBのほうが良いと思う。

○どちらともいえない

・僕はBで書いています。Bの方が真ん中を空ける理由が明確で、続けて書くときに違和感がないからです。しかし機能性で考えるとAのほうが良いのかもしれませんが。横画が連続するので速く書け、また覚えやすいからです。整えやすさという点ではどちらも変わらないと思います。僕はかつてよく書きたいとき、書道のときなどでは、白を旧にして書いています。

(傍線筆者)

まず、Aを推奨する意見としては、Aでいうところの4、5画目が直線になりやすいというところに整いを見出している意見が特筆できるだろう。ほかにもBを推奨する意見には「動きが面倒」という意見があったり、外側をまず囲んだほうが字形が整うという意見もあることがみてとれる。囲んでからのほうが書きやすいというのは、文字を書く前に、大体の概形をつかむために書く前に丸で囲んでみることや、デザイナーが図形を描写する際に「アタリをつける」ために大体の形を囲む考え方と似ている。Bを推奨する意見としては、実際に普段つなげて書いていることへの反省のような意見がみられることがわかる。Bのほうが良いという意見を書いた学生は全て普段Aで書いているとのことであった。ほかにも字がうまくない場合はBのほうがよいという意見もあったが、学習者によって筆順を変えるべきという意見であろう。また、エッセイに書いたどちらの筆順のほうが「速く、整えて、楽に」書くことができるかを工学的に考えてみることについての意見は出なかったが、直線距離の比較以上のことを教室内で議論するのは難しかったのかもしれない。基にする字形によって異なるかもしれないが、基本的に直線距離ではBのほうが短くなるようである。

(3) 実践を終えて

AとB、どちらが良いかについて、当然のことながら教室内で意見を統一することにはならなかった。『筆順指導の手びき』で筆順を一字一則で定めた際は、かなりの激論が交わされたようであるが、手びき作成時の苦心のようなものを学生が多少想起することができたのではないだろうか¹²。また、現在の学校教育における筆順の理解に資することにはなったと思われる。教員の技能としては、筆順指導に準じた筆順は一字形一筆順として覚える必要があることも再度確認した。エッセイでは、濁の手書きの字体についての話題も少し触れたが、筆順の指導ではそこまで触れることができなかった。字形について学習する際には、教科書体活字の字体や字形の話とからめ、筆順指導を再度振り返ることとしたい。

3 『筆順指導の手びき』以外の基準をさぐる

(1) 国定第二期本、書方手本の「濁」の筆順

ここでは『筆順指導の手びき』以外に、国が示したのものの中に「濁」の筆順の参考になるものがないかさぐることとする。1948（昭和23）年の当用漢字別表と同年発行された当用漢字字体表をみると「稲」も含めて「白」を含む字体は使用されないことになっている。「白」の筆順について国が示したものをさぐるには、

一し」で掲載したものである。近世、寺子屋（手習塾）で流麗な御家流の文字が個人指導で学ばれたとき、筆順はとりたてて指導する必要はなかったが、近代、学ばれる文字そのものと学びの環境は劇的に変化した。一斉教授が導入され、楷書が事実上の標準体となったことをふまえれば、教科書に筆順の提示がなされるのは必然だった。

この第五期本国民科国語教科書の教師用書には、「稻」（よみかた四）「寫」（初等科国語二）「舊」（初等科国語五）「陷」（初等科国語八）の筆順が提示されており、それぞれ「白」が含まれる。【図八】²⁰は「舊」の例であるが、「稻」以外はこのように二つの筆順が示され、どちらで指導してもよいことになっている。縦書きであるので右に掲載された筆順が先、つまりAパターンのほうが若干優勢といえないだろうか。「稻」は、Aパターンのみを掲載しており、ここでもAパターンが重視されているといえる。

(4) 資料の考察

ここでは、国が示したものというくくりで、戦前の国定教科書から筆順を確かめることを試みた。AB両方が使用されてきたようだが、若干Aのほうが優勢といえよう。五期本の教師用書に両者が併記されていたことから、戦前から国としてもどちらをとるかを決めかねていたことがみてとれる。「白」やそれを含む漢字は、これまでいわゆる教育漢字には入ってこなかったとはいえ、旧字体の文字にはよく登場する。ここでは触れなかったが、当用漢字以前に民間から出版された字書、指導書、教育書、手習いの参考書などに筆順のパターンは掲載されているのではないかと思われる。それらのなかでは、速さや美感など、「白」の筆順の「機能面」についての議論、字源とからめた筆順論が議論されていた可能性もある。このような資料の発掘については、今後の研究の進展をまちたいと思う。

おわりに

本稿では、教員養成学部の学生が筆順についての理解を深めるため、「渦」の筆順について考えることを起点とした実践の構想と展開を紹介した。「渦」の筆順の一字一則を定めるとすれば、2種あるうち、どちらをとるかということに着目しながら、新潟大学の教員養成学部学生の興味関心を引くことができたと感じている。この話題は、不易と流行ということではいけば流行にあたる。いずれ「渦」の筆順を記した教科書は発行され、小学生に学ばれることである。流行を重視したために、筆順を一定の原理原則を理解させながら指導することなど、不易の部分の学習事項を軽視することがあってはならないだろう。望ましい筆順やその原理を習得させながらも『筆順指導の手びき』の示すような筆順のゆるやかな考え方の理念を適切に理解することは教員養成で行われる必要があるだろう。

¹ 文部省『筆順指導の手びき』博文堂出版、1958。

² 文化庁『常用漢字表の字体・字形に関する指針 文化審議会国語分科会報告（平成28年2月29日）』三省堂、2016。

³ 文化審議会「改訂常用漢字表（平成22年6月7日 文化審議会答申）」2010。

⁴ 文部科学省「小学校学習指導要領（平成20年3月告示 平成27年3月一部改正）」2015。

⁵ 常用漢字表の考え方に立てば、字体とは文字の骨組みを示した観念体、字形とは実際に見える形になったものととらえるのが一般的である。

⁶ 久米公『筆順指導総覧－新漢字表による』みつる教育図書出版、1977、48ページ。

⁷ 許慎選、段玉裁注『説文解字注』上海戸籍出版、1981、105ページ。

⁸ 全国大学書写書道教育学会編『明解書写教育 増補新訂版』萱原書房、2013。

⁹ 松本仁志『筆順のはなし』中央公論新社、2012、33ページ。

¹⁰ 押木秀樹「手書き文字研究の基礎としての研究の視点と研究構造の例」全国大学書道学会編『書写書道教育研究』11号、萱原書房、1997。

¹¹ 前掲松本、『筆順のはなし』66ページ。

¹² 手びき作成の苦勞や逸話については、小林（小林一仁『バツをつけない漢字指導』大修館書店、1998、227ページ。）や松本（松本、前掲『筆順のはなし』201～203ページ。）に詳しい。

- ¹³ 文部省『尋常小学書キ方手本』第六学年用下甲種, 1910。文部省『尋常小学書キ方手本』第六学年用下乙種, 1910。楷書の文字は, 行書に合わせて拡大した。
- ¹⁴ 林大「当用漢字表の問題点」『覆刻 文化庁国語シリーズⅥ 漢字』1974, 294ページ。
- ¹⁵ 新興日本書道会『新興日本書道』2巻7号, 1936, 10ページ。
- ¹⁶ 同上, 10ページ。
- ¹⁷ 久保田義一「竹田津極山について—昭和戦前から戦後の書家・書道教育者—」梅花女子大学『梅花女子大学文学部紀要 日本語・日本文学編』35, 梅花女子大学, 2001, 43ページ。
- ¹⁸ 竹田津永安『小学書方手本新指導書 甲種用尋常科四学年上』東洋図書, 1936, 191ページ。付録の掛図も同様の筆順を示している。
- ¹⁹ 前掲松本, 『筆順のはなし』144ページ。
- ²⁰ 仲新, 稲垣忠彦, 佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法集成 第六巻 教師用書2 国語編』東京書籍, 521ページ。